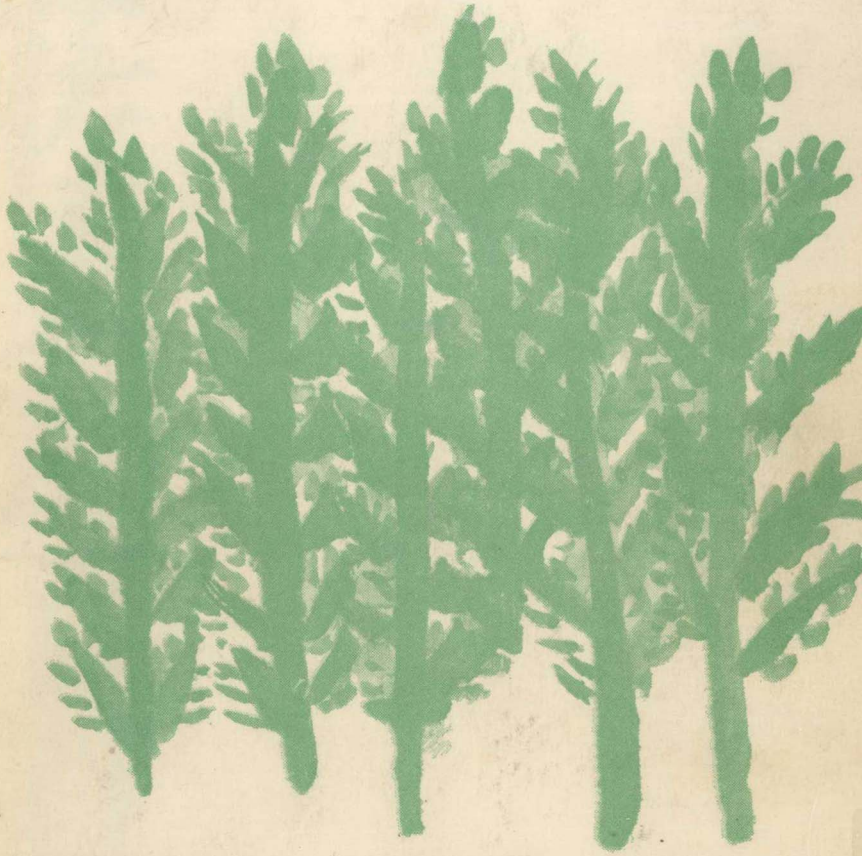
佐藤佐太郎百首

佐藤志満編



短歌新聞社

佐藤志滿編

佐藤佐太郎百首

江苏省图书馆
苏州大学图书馆藏章

短歌新聞社

佐藤佐太郎百首

平成3年4月29日初版発行
平成3年11月3日再版発行

著　者　佐藤志満
発行者　石黒清介
印刷所　有限会社ニッカ
発行所　短歌新聞社
〒166　東京都杉並区高円寺南4—43—9
振替口座東京5—21683番
電　話(03) 3314—9185

定価 2200円（本体2136円）
ISBN4-8039-0634-3　C0092　P2200E

序

この本は題名の示す通り佐藤佐太郎の短歌、百首を選び、その一首一首に「歩道」会員百名が解説と鑑賞をつけたものである。残された歌集十三冊、歌数七千余首の中から百首のみ選ぶのは容易なことではなかった。佐藤は歌集にする時点で意に満たないものはどんどん削っていた事もあって、どの歌も削るには惜しい気がした。幸い本人が生前に選んで小冊子とした『及辰園百首附自註』とそれにつづく「及辰園続百首」（六十余首を書いた所で終っている）また、『佐藤佐太郎自選歌抄』千二百余首）も残されており、その中から本人の好んだであろう歌を主として選んだ。さらに『歩道』『しろたへ』『立房』など初期の歌は全部捨てたいと云っていたことが思い出されたが、初期の歌からも選出して鑑賞に委ねた。これら百首を以て、佐藤の作歌六十年をかえりみていただけたらありがたい。

さて、「歩道」会員から執筆者百人を選ぶという事になると百首の歌を選ぶ以上に私には重荷であった。普段歩道誌上で活躍している人はわけなく選んだが、後は運を天にまかせるような気持で出来るだけ公平に、あの気むずかしい何よりも虚飾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

通俗を嫌った佐藤の歌を理解してくれそうな人にお願いすることにした。私の力の足りない所を許して下され、常に歌壇に対して寡黙な歩道会員がこの機会に佐藤の短歌に対する真の理解者として力いっぱい書いてくださることを願っている。

平成二年十一月十三日

佐藤志満

凡例

一、本書は佐藤佐太郎の代表的な短歌百首に、歩道会員百人が一人一首ずつ分担し、解説と鑑賞を試みたものである。

二、作品の選出は昭和五十七年までは『佐藤佐太郎自選歌抄』（角川書店）により、昭和五十八年以降は最終歌集『黄月』によった。

三、掲出作品の表記等は前出二著のものにより漢字は現在通用のものとした。また仮名遣については、作品は歴史的仮名遣、文章は現代仮名遣とし、平明な現代語で表記することを旨とした。引用についてはその原典の表記によった。

四、佐藤佐太郎の自歌自註については歌誌「歩道」の初出（歴史的仮名遣）、『短歌を作るこころ』（現代仮名遣）所収のもの等の数種があるが、各執筆者の意図に従った。しばしば引用される『及辰園百首附自註』（書名）は「及辰園百首」と略称する場合もある。

五、原則として執筆稿は原文のまま載せてあるが、あきらかな誤記等は編集者の責任において改めてある。

歌集一覧

一、『軽風』　昭和十七年七月、八雲書林刊。大正十五・昭和二年から昭和八年前半までの作品三六九首所収。

二、『歩道』　昭和十五年九月、八雲書林刊。昭和八年後半から昭和十五年前半までの作品五六八首所収。

三、『しろたへ』　昭和十九年十月、青磁社刊。昭和十五年後半から昭和十八年までの作品四七五首所収。

四、『立房』　昭和二十二年七月、永言社刊。昭和二十年八月から昭和二十一年までの作品四四〇首所収。（なお、本書は昭和二十五年十月刊の白玉書房版もある。）

五、『帰潮』　昭和二十七年二月、第二書房刊。昭和二十二年から昭和二十五年までの作品五六六首所収。

六、『地表』　昭和三十一年七月、白玉書房刊。昭和二十六年から昭和三十年までの作品四八三首所収。

七、『群丘』昭和三十七年十二月、短歌研究社刊。昭和三十一年から昭和三十六年までの作品五七二首所収。

八、『冬木』昭和四十一年八月、短歌研究社刊。昭和三十七年から昭和四十年までの作品五五二首所収。

九、『形影』昭和四十五年三月、短歌研究社刊。昭和四十一年から昭和四十四年までの作品五一四首所収。

十、『開冬』昭和五十年九月、弥生書房刊。昭和四十五年から昭和四十九年までの作品五七六首所収。

十一、『天眼』昭和五十四年四月、講談社刊。昭和五十年から昭和五十三年までの作品四八四首所収。

十二、『星宿』昭和五十八年八月、岩波書店刊。昭和五十四年から昭和五十七年までの作品五〇一首所収。

十三、『黄月』昭和六十三年九月。短歌新聞社刊。昭和五十八年から昭和六十二年までの作品三〇九首所収。

全歌集・選集一覧

一、『佐藤佐太郎全歌集』昭和五十二年十一月、講談社刊。昭和五十年までの作品、補遺も含め

て五三二六首所収。

二、『佐藤佐太郎歌集』（角川文庫）　昭和二十八年五月刊（『帰潮』までの歌四〇〇首所収）。昭和四十四年六月、改選版刊（『形影』までの歌六〇〇首所収）。

三、『佐藤佐太郎作品集』昭和三十四年二月、四季書房刊。『軽風』から『群丘』の前半までの作品から六〇〇首選出所収。

四、『海雲』昭和四十六年四月、短歌新聞社刊。『群丘』の後半から『形影』までの作品から五〇〇首選出所収。

五、『佐藤佐太郎自選歌抄』昭和六十一年十二月、角川書店刊。『軽風』から『星宿』までの歌集から一二三五首自選所収。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『佐藤佐太郎百首』　目　次

生あたたかき桑の実はむと桑畑に幼き頃はよく遊びけり（軽風）
暮方にわが歩み来しかたはらは押し合ひざまに蓮しげりたり（歩道）
鋪道には何も通らぬひとときが折々ありぬ硝子戸のそと
薄明のわが意識にてきこえくる青杉を焚く音とおもひき
をりをりの吾が幸よかなしみをともに交へて来りけらずや
地下道を人群れてゆくおのおのは夕の雪にぬれし人の香（しろたへ）
暁の降るさみだれやわが家はおもても裏も雨の音ぞする
静かなるしろき光は中空の月より来るあふぎて立てば
風はかく清くも吹くかものなべて虚しき跡にわれは立てれば（立房）
苦しみて生きつつ居れば枇杷の花終りて冬の後半となる（帰潮）
冬の光移りてさすを目に見ゆる時の流といひて寂しむ
壺のなかに蝿の幼虫のうごきゐる家の貧困を人も見るべし
魚のごと冷えつつおもふ貧しきは貧しきものの連想を持つ
地ひくく咲きて明らけき菊の花音あるごとく冬の日はさす
貧しさに耐へつつ生きて或る時はこころいたいたし夜の白雲
秋分の日の電車にて床にさす光もともに運ばれて行く
わが来たる浜の離宮のひろき池に帰潮のうごく冬のゆふぐれ
秋彼岸すぎて今日ふるさむき雨直なる雨は芝生に沈む（地表）
颱風のあらぶるなかに鶏の産卵の声しばらくきこゆ
北上の山塊に無数の襞見ゆる地表ひとしきり沈痛にして

由谷一郎……一六
榛原駿吉……一八
平井寛……二〇
梅田敏男……二三
岡野千佳代……二四
大方一義……二六
各務由紀……二八
長坂梗……三〇
松生富喜子……三三
長谷川進一……三四
杉山太郎……三六
菰田康彦……三八
壇千里……四〇
滝川愛親……四三
黒田淑子……四四
新居田夫左武……四六
大塚栄一……四八
斎藤尚子……五〇
香川末光……五三
島原信義……五四

能登の海ひた荒れし日は夕づきて海にかたむく赤き棚雲
波さわぎいたぶる潮の流よりうつつの音は低くきこゆる（群丘）
平炉より鋳鍋にたぎちゐる炎火の真髄は白きかがやき
季の移りおもむろにして長きゆゑ咲くにかあらんこの返花
白藤の花にむらがる蜂の音あゆみさかりてその音はなし
現なるこころのながれ惜しみつつかすかに生きてありと思はん
青々と晴れとほりたる中空に夕かげり顕つときは寂しも
浅間より砂礫ふるときわが庭につづく田の水たちまち濁る
ひろびろと浜の常なる寂しさかわが真近くの波はとどろく
潮いぶきたつにかあらん静かなる夜半にて月をめぐる虹の輪
凍りたる海よりも雲くらからん一望にしてただ白き海（冬木）
まのあたり浄土曼陀羅に楼閣のあること寂し仏あそべど
冬の日といへど一日は長からん刈田に降りていこふ鴉ら
空わたり来る鶴のむれまのあたり声さわがしく近づきにけり
身辺のわづらはしきを思へれど妻を経て波のなごりのごとし
白鳥の群とびたちてひとしきり雪山の上ゆれつつわたる
限りなき砂のつづきに見ゆるもの雨の痕跡と風の痕跡
くれなゐの砂漠のはてと夕映の間に暮れてゆくところあり
憂なくわが日々はあれ紅梅の花すぎてよりふたたび冬木
犬などにけだものの臭ひ淡きこと互に長く親しみしかば

上村閑子夫……五六
四元　仰……五八
小山正一……六〇
久住滋巍……六二
加古敬子……六四
務台貞義……六六
甲斐典夫……六八
高橋正幸……七〇
谷　栄一……七二
金岡　茂……七四
佐藤佳子……七六
佐藤志満……七八
兵藤正登次……八〇
八重嶋　勲……八二
篠田和代……八四
千田伸一……八六
小林林之助……八八
越智敏見……九〇
藤原敬二……九二
佐々木　勉……九四

いちはやく壯きとき過ぎて珈琲をのみし口中の酸をわびしむ
あたたかき冬至の一日くるるころ浜辺にいでて入日を送る（形影）
海猫は雛はぐくみて粥のごと半消化せる魚を吐き出す
冬山の青岸渡寺の庭にいでて風にかたむく那智の滝みゆ
波さむき汀の砂はあなあはれ雪にほとびて踏みごたへなし
寺庭に消のこる雪をぬきいでて紅梅一木さく偈頌のごとくに
夕光のなかにまぶしく花みちてしだれ桜は輝を垂る
あるときは幼き者を手にいだき苗のごとしと謂ひてかなしむ
われを捐てず相伴ひし三十年妻のこゑ太くなりたるあはれ
やや遠き光となりて見ゆる湖六十年のこころを照らせ
鳥雀のごとたあいなく秋の日のいまだ暮れざるに夕飯を待つ
崩壊のあとの石塊にしばし立つ虚しきものは静かさに似る
冬至すぎ一日しづかにて曇よりときをり火花のごとき日がさす（開冬）
六尺の牀によこたへて悔を積むための一生のごとくにおもふ
沼のべの村のしづかさ残汁を護る蜆も風に乾けり
地底湖にしたたる滴かすかにて一瞬の音一劫の音
冬の日の眼に滴つる海あるときは一つの波に海はかくるる
二十年魚の目老いず雪はれし部屋にうづくまり魚の目を削ぐ
草焼きし跡のゆゑもなき静かさやその灰黒く土かたくして
足よわくなりて歩めばゆく春の道に散りたる樟の葉は鳴る

尾藤佐和子……九六
種子島敬司……九八
大津留敬……一〇〇
梅崎保男……一〇三
近藤千恵……一〇四
下原太……一〇六
大野紅花……一〇八
鈴木真澄……一一〇
福田徹……一一三
安川浄生……一一四
猪狩清……一一六
山上蒼……一一八
松生一哲……一二〇
西見恒生……一二三
長栄つや……一二四
菊澤研一……一二六
鎌田和子……一二八
高嶋昭二……一三〇
戸田佳子……一三三
船河正則……一三四

冬ごもる蜂のごとくにある時は一塊の糖にすがらんとする
夜となりてともなふ雷の震ふとき雪つみをれば長くとどろく
暁の海におこりて海を吹く風音寂しさめつつ聞けば
青々としげりて嘉植なきところ足摺崎に海高く見ゆ
みづからの幹をめぐりて枝あそぶ柳一木はふく風のなか
いちはやく若葉となれる桜より風の日花の二三片とぶ
北極の半天を限る氷雪は日にかがやきて白古今なし
衰へしわが聞くゆゑに寂しきか葦の林にかよふ川音（天眼）
みづからの顔を幻に見ることもありて臥床に眠をぞ待つ
ただ広き水見しのみに河口まで来て帰路となるわれの歩みは
灯の暗き昼のホテルに憩ひゐる一時あづけの荷物のごとく
門のうち門のそとにも辛夷ちる風輝を得たる日の記念にて
青天となりし午すぎ無花果をくひて残暑の香をなつかしむ
台風の余波ふく街のいづこにもおしろいが咲く下馬あたり
病みながら痛むところの身に無きを相対的によろこびとせん
朝寒くかたちかすけき白魚に魚の香のあることを寂しむ
道に逢ふ杖もつ人は健康者よりも運命に振幅あらん
島あれば島にむかひて寄る波の常わたなかに見ゆる寂しさ
春ちかきころ年々のあくがれかゆふべ梢に空の香のあり
旧恨も新愁もなきおいびととして冬庭にひかりを浴ぶる

渡辺良彦……一三六
小田裕侯……一三八
小久保勝治……一四〇
山上次郎……一四二
安嶋彌……一四四
磯崎良誉……一四六
加来進……一四八
江畑耕作……一五〇
高橋一郎……一五二
小田朝雄……一五四
黒岩二郎……一五六
長田邦雄……一五八
石井伊三郎……一六〇
菊地正子……一六二
渡辺良臣……一六四
田野陽……一六六
青田伸夫……一六八
飯塚和子……一七〇
波克彦……一七二
徳田美栄子……一七四

いたるところ皆老ゆべしと割切りて歩みゆく蛇崩歳晩の道　松本　武……一六六
来日の多からぬわが惜しむとき春無辺にて梅の花ちる（星宿）　渡辺　謙……一六八
珈琲を活力としてのむときに寂しく匙の鳴る音を聞く　大橋　美恵子……一七〇
わがごときさへ神の意を忖度す犬馬の小さき変種を見れば　上原　照男……一七二
きはまれる青天はうれひよぶならん出でて歩めば冬の日寂し　伊藤　いく子……一七四
ひとときに咲く白き梅玄関をいでて声なき花に驚く　和歌森　玉枝……一七六
おのづから星宿移りゐるごとき壮観はわがほとりにも見ゆ　橋本　善七……一七八
やむを得ずおもむろにゆくわが歩みのみならず速かにあらぬ飲食　山本　昭子……一八〇
ひとところ蛇崩道に音のなき祭礼のごと菊の花さく　市田　渡……一八二
落月のいまだ落ちざる空のごと静かに人をあらしめたまへ　小鹿野　富士雄……一八四
杖ひきて日々遊歩道ゆきし人このごろ見ずと何時人は言ふ　向山　忠三……一八六
夏あさく街路樹のさくころとなりむらさきつつじわれを富ましむ　佐保田　芳　訓……一八八
いまわれは老齢の数のうちにありかつて語らぬ人の寂しさ　横尾　忠作……一〇〇
暗きよりめざめてをれば空わたる鐘の音朝の寒気を救ふ　吉田　和気子……一〇二
日々あゆむ遊歩道にて川音の近く聞こゆる風の日のあり（黄月）　浅井　喜多治……一〇四
流氷のただよふ上に辛うじて命たもちし三人帰る　荒木　千春子……一〇六
葉をもるる夕日の光ちかづきて金木犀の散る花となる　河原　冬蔵……一〇八
むらさきの彗星光る空ありと知りて帰るもゆたかならずや　秋葉　四郎……一一〇
夜更けて寂しけれども時により唄ふがごとき長き風音　香川　美人……一一二
中空の無数の星の光にも盛衰交替のとき常にあり　片山　新一郎……一一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com